

## 東南アジア史学会会報 №22

昭和49年9月

### 委員会等報告

#### 学会第2回委員会

昭和49年4月15日、神田学士会館で開催。

出席者 白鳥会長、山本、竹田、和田、永積、量、青柳、市川の7委員。

報告事項、1) 昭和48年12月に学会事務を東京外国语大学A.A研より上智大学文学部白鳥研究室へ移管、2) 昭和49年4月に学会会報№21を会員へ配布、3) 昭和48年11月以来の新入会員10名を加え、現在の会員総数168名、4) 会計現状報告。

審議事項、1) 夏季研究大会の準備、2) 秋季研究大会・総会の企画、3) 会費値上げ案（継続審議とする）、4) 機関誌の発行と印刷事情について。

なお、第4の審議事項に関して、4月22日に白鳥会長と市川委員が平凡社を訪れ、編集部学芸第2課吉田課長と会談した。その結果、昨年度と同様のページ数と定価を維持するためには、紙質、活字、図版、挿図等の各部門でコスト・ダウンの抜本策を講ずることとした。

#### 学会第3回委員会

昭和49年9月14日、神田学士会館で開催。

出席者 白鳥会長、山本、市川、永積、量の5委員。

報告事項、1) 海外研究者の秋季研究大会参加希望について。

審議事項、1) 秋季研究大会・総会の企画、2) 海外留学中の会費徴収について、3) 学会の日常活動について（総会提出議案）、4) 会費値上げ案（総会提出議案）、5) 英文学会名入りの便箋・封筒の作成について。

#### 第1回編集委員会

5月15日、平凡社で開催。

出席者 白鳥会長、山本、和田、永積、市川の4委員および平凡社吉田課長。次号の編集方針、寄稿論文等の各著者との編集事務連絡事項等を打合せた。

— 2 —

### 第2回編集委員会

6月22日、平凡社で開催。

出席者 白鳥会長、山本、永積、生田、市川の4委員および平凡社吉田課長。印刷事務連絡と編集業務、経費削減のための節約策を計った。

### 前会長のタイ在留

河部利夫前会長は昭和49年5月下旬より昭和50年4月までチュラロンコーン大学、タマナート大学訪問教授としてバンコクに在留されている。住所は下記のとおりである。

Phan-phit Court, 160 Phiphat 2,  
Silom Road, Bangkok, THAILAND.  
Tel. Bangkok, 39825-9

### 夏季研究大会

昭和49年6月1日午前10時より午後5時まで、上智大学7号館14階特別会議室で開催。午前10-12時、大林太良「ベトナム民主共和国における民族学・考古学の近況」（司会者：市川健二郎、質問者：山本達郎、松本信広、白鳥芳郎、近森正、桜井由躬雄、伊東照司）。午後1-3時、池端雪浦「最近のフィリピン史研究の動向と史料に関する若干の情報」（司会者：山本達郎、質問者：永積昭、高橋彰、内田晶子）。午後3-5時、永積昭「第6回国際アジア歴史学者会議について」（討論者：板垣与一、明石陽至、市川健二郎、白鳥芳郎）。なお、大林、池端両氏の発表要旨は下記のとおりである。

### ベトナム民主共和国における民族学、考古学研究の近況

大林太良

私は1973年11月にベトナム民主共和国对外文化連絡委員会の招待により、松本清張、江上波夫両氏とともに同国を訪れた。僅か10日間の滞在であったが、同国各方面の好意により、同国における民族学、考古学の近況につき多くを知ることができた「この旅行の印象と収穫に

— 2 —

### 第2回編集委員会

6月22日、平凡社で開催。

出席者 白鳥会長、山本、永積、生田、市川の4委員および平凡社吉田課長。印刷事務連絡と編集業務、経費削減のための節約策を計った。

### 前会長のタイ在留

河部利夫前会長は昭和49年5月下旬より昭和50年4月までチュラロンコーン大学、タマナート大学訪問教授としてバンコクに在留されている。住所は下記のとおりである。

Phan-phit Court, 160 Phiphat 2,  
Silom Road, Bangkok, THAILAND.  
Tel. Bangkok, 39825-9

### 夏季研究大会

昭和49年6月1日午前10時より午後5時まで、上智大学7号館14階特別会議室で開催。午前10-12時、大林太良「ベトナム民主共和国における民族学・考古学の近況」（司会者：市川健二郎、質問者：山本達郎、松本信広、白鳥芳郎、近森正、桜井由躬雄、伊東照司）。午後1-3時、池端雪浦「最近のフィリピン史研究の動向と史料に関する若干の情報」（司会者：山本達郎、質問者：永積昭、高橋彰、内田晶子）。午後3-5時、永積昭「第6回国際アジア歴史学者会議について」（討論者：板垣与一、明石陽至、市川健二郎、白鳥芳郎）。なお、大林、池端両氏の発表要旨は下記のとおりである。

### ベトナム民主共和国における民族学、考古学研究の近況

大林太良

私は1973年11月にベトナム民主共和国对外文化連絡委員会の招待により、松本清張、江上波夫両氏とともに同国を訪れた。僅か10日間の滞在であったが、同国各方面の好意により、同国における民族学、考古学の近況につき多くを知ることができた「この旅行の印象と収穫に

ついては、我われ3名による『朝日新聞』(1973年12月に連載)、『朝日ジャーナル』(1974年2月1, 8, 15日号)の記事および、大林の『ばれるが』1974年3月号の記事を参照されたい」。

我われを何よりも驚いたのは、あの長期にわたる戦争の困難な条件下において、北ベトナムの学者が着実に調査研究を進め、かつその成果を発表していることであった。民族学、考古学に関しては第一線の研究者の年令は若く、ほとんど40才以下である。北ベトナムにおける研究機関としては、他の社会主義国のアカデミーに相当する社会科学委員会があり、それに所属する民族学院、考古学院において、それぞれ、ベトナムの民族学、ベトナムの考古学の研究が進められている。また同委員会所属の東南アジア学院では、ベトナムに限らず東南アジアの研究を行い、民族学もその関心の一つである。そのほか大学や、歴史博物館や中央民族委員会などにも研究者がいる。

これら研究機関に属する若い研究者には、国外留学によって訓練を受けたものもいるが、留学先はソ連が多く、考古学者のなかには東ドイツ、中国で勉強したものもある。他方、外国学者の北ベトナムにおける調査は、考古学においてはソ連、民族学においてはソ連、東ドイツ、ハンガリーの学者が実地調査をしたことがある。また北ベトナムの考古学や民族学の雑誌には、ソ連学者の論文が記載されることもある。

国内に36の少数民族をもち、かつ、西北自治区、越北自治区という二つの自治区をもつベトナム民主共和国における民族学研究では、国内の少数民族研究が極めて大きな比重を占めている。これら諸民族の調査の結果は、すでに数冊の単行本として出版されたほか、1972年以降、『民族通報』*Thong bao dau toc hoc* が民族学院機関誌として刊行され、すでに3号出ている。また、*Etudes Vietnamien*nes 双書には、No.32として、*Données Ethnographiques I* (1971)とII (1973)が出版されており、前者にはMung族とThai族の調査報告、後者にはMeo族、Kmu族、西北地区のチベット・ビルマ語族の調査報告が入っており、かつIにはLe Van Hao氏執筆の北ベトナムにおける民族学研究の動向を記した学界展望も出ているので、この2冊によって、ベトナム語を解せぬ者でも、ベトナム学者の成果が或る程度つかむことができる(Iには英訳も出ている)。

北ベトナムにおける少数民族研究には、政策と直接結びつく現実的課題のあることは勿論であるが、その事については、同上双書のNo.15即ち、*Régions Montagneuses et Minorités nationales en RDV* (1967)がある。

北ベトナムの民族学的調査は、個々の民族単位の確認と分類という基礎的な仕事を第一の課

題としている。その結果、例えば、Zao (Yao) 族の 11 群は、二大方言を話す 4 大群をなすこと、採集狩猟民としては Chut 族として総括される 4 族があり、Viet-Muong 語系であることなどが明らかにされた。

北ベトナムの民族学界には歴史民族学的関心が強く、たとえば、『民族通報』1968 年 1 号には、Nguyen Duong Binh 氏が、越族と Muong 族との間の親縁関係を論じているし、また後述の雄王時代シンポジウムにも、民族学者が活潑に参加している。一般的に、エンゲルスの図式の公式的適用はあまり見られず、着実な調査が多いという印象を受けた。

北ベトナムの考古学調査は、1957-58 年ごろから本格的に始まった。考古学院の機関誌『考古学』Khao Co Hoc は、1969 年以来刊行されており、また歴史博物館からも、本格的な報告書が数冊出ている。これらの成果の要約は、『ベトナム歴史』Lich Su Viet Nam 第 1 卷 (1971) に見られる。Etudes Vietnamnaises 双書の 1 冊として、考古学に関するものが 1974 年刊行予定と聞くが、まだ入手していない。

北ベトナム考古学の最近の重要な成果は、従来知られていなかった諸文化の存在が明らかにされ、北ベトナム先史文化の全体像がほぼ把握出来るようになって来たことである。たとえば、従来知られていた Hoabinhian 文化、Bacsonian 文化以前にも、Do 山遺跡によって代表される前期旧石器文化、北部山地の洞窟諸遺跡の文化や、紅河の古い河岸段丘の Son Vi 文化によって示される後期旧石器文化の存在が明らかにされた。他方、Dong Son 文化に先行する青銅器諸文化として、Phung-Nguyen 文化、Dong-Dau 文化、Go-Mun 文化の三つが紅河流域で継起したことが明らかになった。北ベトナムの考古学者は、これら青銅器諸文化を、伝説的歴史における雄王の時代に同定し、『雄王時代』が、ベトナム民族形成にとって決定的な時代であると見て、その研究に大きな努力を払っている。雄王時代研究については、何回もシンポジウムが開かれ、今までに 3 冊の紀要として公刊され、かつそれら研究を一般向けにまとめた小冊子『フン王の時代』も 1973 年に出版されている。

なお北ベトナム諸遺跡の C-14 年代測定は、大部分が東ドイツ、一部がソ連で行われている。それによれば、Hoabinhian 文化 (Hang Dang 遺跡) は 5715 B.C., Bacsonian 文化最古期 (Po Nam 遺跡) は 6010 B.C., Phung Nguyen 文化は Trang Keng 遺跡が  $1455 \pm 100$  B.C., Dong Dau 遺跡の Phung Nguyen 層が 1378 B.C., Dong Dau 文化 (Vuon Chuoi 遺跡) が  $1120 \pm 100$  B.C., Go Mun 文化 (Vinh Quang 遺跡) が  $1096 \pm 120$  B.C., Dongson 文化前期 (Dong Son 遺跡) が  $850 \pm 120$  B.C.、という値を出している。

北ベトナム考古学界では、自生的な文化発展を強調する傾向と、伝説的歴史との結びつきに対して肯定的な立場が顕著に見られる。ベトナム先史文化を、東南アジア、東アジアの先史文化の文脈中に位置づけることは、今後の大きな課題である。

## 最近のフィリピン史研究の動向と史料に関する若干の情報

池端雪浦

私は1972年8月から73年12月まで、フィリピンで留学生活を送りました。本日はその時の調査をもとに、最近のフィリピン史研究の動向と史料に関する若干の情報を紹介しようと思います。別紙に関係の主要な文献を7つの領域に分けてリストアップしてみましたが、ここでは紙面の関係上全体についてふれる余裕がありませんので、第Ⅱ、第Ⅲ、第Ⅳの項目についてのみ説明をいたします。

今回9年ぶりにフィリピンを訪れてひじょうに驚いたことのひとつは、タガログ語ないしはピリピノが、社会のさまざまな方面でかってない勢いで用いられていたことでした。この傾向は60年代半ば頃から70年代初頭にかけてはげしい高揚をみせた民族主義運動と密接な関連をもっているとみられます。文化領域における民族主義の確立をめざして、土着言語による文化遺産の発掘や再評価が進められ、ピリピノによる文学作品の発表もさかんでした。別掲第Ⅱ項の著作は、これらの運動と直接の関係をもつものではありません。しかし、José Villa Panganiban, Leo Fames English両氏の永年にわたる辞書編纂の努力は、はからずもこれらの動きと時を同じくして結実し、タガログ語=ピリピノの理解と普及にはかりしれない貢献をしました。また*Brown Heritage*は、フィリピンの文化と文学を広い視野と多面的な角度から論じた評論集で、この分野の必読の入門書といえます。

次に第Ⅲ項の日本占領時代に関する研究と史料について。この分野は今回私が研究テーマとしたところでした。ここではとくにフィリピンにおけるこの時期の史料についてふれておきます。まず第一に挙げられるのは、国立フィリピン大学中央図書館所蔵の「日本占領文書」です。日本軍及び傀儡政権の命令、布告、調査報告、政府高官宛及び高官からの手紙など約280点からなります。蒐集者不明とされていますが、内容からみて米比軍の諜報部で集めたものではないでしょうか。次に私は直接内容にふれておりませんが、国立古文書館には極東裁判のマニラ裁判関係の文書が納められています。またフィリピン軍の各地の資料室にはゲリラ運動関係の資料が保管されています。その他、対日協力の大立者José P. Laurel, Jorge B.

北ベトナム考古学界では、自生的な文化発展を強調する傾向と、伝説的歴史との結びつきに対して肯定的な立場が顕著に見られる。ベトナム先史文化を、東南アジア、東アジアの先史文化の文脈中に位置づけることは、今後の大きな課題である。

## 最近のフィリピン史研究の動向と史料に関する若干の情報

池端雪浦

私は1972年8月から73年12月まで、フィリピンで留学生活を送りました。本日はその時の調査をもとに、最近のフィリピン史研究の動向と史料に関する若干の情報を紹介しようと思います。別紙に関係の主要な文献を7つの領域に分けてリストアップしてみましたが、ここでは紙面の関係上全体についてふれる余裕がありませんので、第Ⅱ、第Ⅲ、第Ⅳの項目についてのみ説明をいたします。

今回9年ぶりにフィリピンを訪れてひじょうに驚いたことのひとつは、タガログ語ないしはピリピノが、社会のさまざまな方面でかってない勢いで用いられていたことでした。この傾向は60年代半ば頃から70年代初頭にかけてはげしい高揚をみせた民族主義運動と密接な関連をもっているとみられます。文化領域における民族主義の確立をめざして、土着言語による文化遺産の発掘や再評価が進められ、ピリピノによる文学作品の発表もさかんでした。別掲第Ⅱ項の著作は、これらの運動と直接の関係をもつものではありません。しかし、José Villa Panganiban, Leo Fames English両氏の永年にわたる辞書編纂の努力は、はからずもこれらの動きと時を同じくして結実し、タガログ語=ピリピノの理解と普及にはかりしれない貢献をしました。また*Brown Heritage*は、フィリピンの文化と文学を広い視野と多面的な角度から論じた評論集で、この分野の必読の入門書といえます。

次に第Ⅲ項の日本占領時代に関する研究と史料について。この分野は今回私が研究テーマとしたところでした。ここではとくにフィリピンにおけるこの時期の史料についてふれておきます。まず第一に挙げられるのは、国立フィリピン大学中央図書館所蔵の「日本占領文書」です。日本軍及び傀儡政権の命令、布告、調査報告、政府高官宛及び高官からの手紙など約280点からなります。蒐集者不明とされていますが、内容からみて米比軍の諜報部で集めたものではないでしょうか。次に私は直接内容にふれておりませんが、国立古文書館には極東裁判のマニラ裁判関係の文書が納められています。またフィリピン軍の各地の資料室にはゲリラ運動関係の資料が保管されています。その他、対日協力の大立者José P. Laurel, Jorge B.

Vargas, Claro M. Recto らの個人図書館にも若干の史料が残されています。

既刊の史料集として、 A. V. H. Hartendorp と Mauro Garcia の著作を挙げておきました。前者は敵性国人収容所に収容されていた著者が各地から送り込まれてきた捕虜から日本軍政の実状を聞きとり、秘密裡に記録した貴重な資料です。後者は Vargas 行政委員会ならびに Laurel 政権閣僚会議の議事録を中心とした記録集です。Garcia 氏はこの後もひきつゝいて *Historical Bulletin* 誌上に、日本軍政関係文書の掲載を続けていますが、出所についてはまったくふれていません。Office of Chief of Counter-Intelligence の出した文献目録は、日本軍側出版物のみならずゲリラ側出版物（ゲリラ新聞など）も収録しており、当面、日本軍政期に関するもっとも基本的な文献目録といえましょう。

次に第IV項のフィリピン革命史関係について。この分野は二つの面で新しい展開を示しています。ひとつは John N. Schumacher 氏の一連の仕事によって、プロパガンダ運動の全貌が明らかにされつゝあること。もうひとつは、フィリピン革命第二期のフィリピン・アメリカ戦争期に新しい研究関心が高まっていることです。フィリピン革命史の研究は従来、カティプーナンの蜂起からフィリピン共和国の成立にいたる第一期に集中していましたが、ヴェトナム戦争に対する認識がフィリピン社会で深まるなかで、アメリカのアジア侵略の原点ともいべきべきフィリピン占領期の問題があらためて問い合わせられるようになりました。John R. M. Taylor の英訳史料集 5巻の刊行ならびに、James H. Blount, Richard Brimsley Sheridan らの証言、ルポルタージュの再版はこのような背景のなかで進められたものです。Taylor の史料集は、もともとアメリカ陸軍の命令で開始された仕事で 1906 年には完成していましたが、比米戦争の真相が国民に知らされるのを恐れた時の国防大臣（Secretary of War）William Howard Taft によって出版を禁じられ、今日まで陽の目をみなかったものです。この史料集の出版によって革命史の研究はひじょうな便宜をえました。アメリカの占領経過について、問い合わせすべき多くの問題がふくまれていることも明らかになってきました。フィリピンの歴史研究はいまようやくアメリカの植民イデオロギーから解放されつゝあるといえましょう。しかし占領期の歴史は、占領者とそれに対する抵抗運動という簡単な図式だけではとらえきれぬ多くの問題をはらんでいます。私は未見ですが、Bonifacio Salamanca の著者は、知識階層の対米協力こそが、この時代を規定した主要なテーマであるとの見方を打ち出しているといわれます。問題の書となることでしょう。

\*1 タガログ語を基礎に形成されつゝある国語。1959 年よりこの名称が用いられるようになった。しかしこれに対してはタガログ語族以外の反撥も多く、1973 年戒厳令下で

成立した新憲法ではフィリピンの名称のもとに、あらためて国語の形成が進められることになっている。しかし、すでに定着しているピリピノを根本的につくりかえることは不可能との見方が一般的である。

### I. 文献目録と通史

Medina, Isagani R., compiled and edited, Filipiniana Materials in the National Library, Quezon City, Published Jointly by National Library and the University of the Philippines Press, 1972, xviii+353p.

Tubangui, Helen, ed. A Catalog of Filipiniana at Valladolid, (Ateneo de Manila Bibliographical Series No.4), Quezon City, Ateneo de Manila University Press, 1973, xv+364p.

Saito, Shiro, Philippine Research Materials and Library Resources: An Overview (Southeast Asian Studies Working Paper No.3), Hawaii, University of Hawaii, 1973, iii+63p.

Agoncillo, Teodoro A., A Short History of the Philippines, New York and Tronto, The New American Library, 1969, 319p.

### II. 言葉と文学

Panganiban, José Villa, Diksyunaryo-Tesauro Pilipino-Ingles, Quezon City, Manlapaz Publishing Co., 1972, xx+1027p.

English, Leo James, English-Tagalog Dictionary, Department of Education, Republic of the Philippines, 1965, xxiv +1211p.

Panganiban, José Villa, Diksiyuntaryong Pilipino-Ingles, 2nd ed., Bede's Publishing House, Inc., 1970, ix+361p.

Manuud, Antonio G., ed. Brown Heritage: Essays on Philippine Cultural Tradition and Literature, Quezon City, Ateneo de Manila University Press, 1967, xvii+885p.

### III. 日本占領時代に関する研究と史料

Office of Chief of Counter-Intelligence Philippine Research and Information Section, GHQ, AFPAC, APO 500, The Philippines During the Japanese Regime, 1942-1945: An Annotated List of the Literature Published in or about the Philippines During the Japanese Occupation, 10 October 1945, Mimeographed, 43p.

Japanese Occupation Papers in the U. P. Collection.

Hartendorp, A. V. H., The Japanese Occupation of the Philippines  
2 Vols. (Vol. I xvi+662p. Vol. II viii+682p.), Manila, Book-  
mark, 1967.

Garcia, Mauro, ed. Documents on the Japanese Occupation of the  
Philippines, Manila, The Philippine Historical Association,  
1965, viii+258p.

Rōyama Masamichi and Takēuchi Tatsuji, The Philippine Polity:  
A Japanese View (Monograph Series No. 12), Yale University  
Southeast Asian Studies, 1967, xxx+293p.

Malay, Armand J., Occupied Philippines: The Role of Jorge B.  
Vargas during the Japanese Occupation, Manila, Filipiniana  
Book Guild, 1967, xiii+304p.

The Combat History Division, G-1 Section, Headquarters,  
AFWESPA "Triumph in the Philippines 1941-1946," Historical  
Bulletin Vol. XVI, Nos. 1-4 (January-December, 1972),  
pp. iii-363.

IV. フィリピン革命関係

Schumacher, John N., The Propaganda Movement: 1880-1895,  
The Creators of a Filipino Consciousness, the Makers of  
Revoluti, Manila, Solidaridad Publishing House, 1973, xii+  
302p.

Schumacher, John N., Father Jose Burgos: Priest and Nationalist  
Quezon City, Ateneo University Press, 1972, xvi+273p.

Taylor, John R. M., The Philippine Insurrection Against the  
United States: A Compilation of Documents with Notes and  
Introduction, 5 vols., Pasay City, Eugenio Lopez Foundation,  
1971-74.

Blount, James H., The American Occupation of the Philippines  
1898-1912, Quezon City, Malaya Books Inc., 1968, 664p.  
(Originally Published in 1913 by G. P. Putnam's Sons, New  
York and London)

Sheridan, Richard Brimsley, The Filipino Martyrs: A Story of the Crime of February 4, 1899, Quezon City, Malaya Books Inc., 1970, 212p. (Originally Published in 1900 by The Bodley Head, London and New York)

Achúegui, Pedro S. de and Miguel A. Bernad, Religious Revolution in the Philippines, 5 vols., Quezon City, Ateneo de Manila University Press, 1961-1972.

Vol. I: The Life and Church of Gregorio Aglipay 1860-1901.

Vol. II: The Life and Church of Gregorio Aglipay.

Vol. III: The Religious Coup d'Etat 1898-1901: A Documentary History.

Vol. IV: The Schism of 1902: A Documentary History.

Salamanca, Bonifacio S., The Filipino Reaction to American Rule: 1901-1913, Hamden Connecticut, The Shoe String Press, Inc., 1968, 310p.

Alfonso, Oscar M., Theodore Roosevelt and the Philippines 1897-1909, Quezon City, University of the Philippines Press, 1970, xvii+227p.

## V. 中 国 人 問 題

See, Chinben, A Bibliography of the Chinese in the Philippines (Pagkakaisa Monograph No.1), Manila, Pagkakaisa sa Pag-unla Inc., 1970, 97p.

Tan, Antonio S., The Chinese in the Philippines, 1898-1935: A Study of Their National Awakening, Quezon City, R. P. Garci Publishing Co., 1972, xiii+417p.

Amyot, Jacques, The Manila Chinese: Familism in the Philippine Environment (IPC Monographs, No.2), Quezon City, Ateneo de Manila University, 1973, xv+170p.

Felix, Alfonso, Jr. ed. The Chinese in the Philippines, 2 vols., Manila, Solidaridad Publishing House, 1966 & 1969.

## VI. ムスリム関係

Majul, Cesar Adib, Muslims in the Philippines, Quezon City, University of the Philippines Press, 1973, xii+392p.

Tan, Samuel K., "Sulu Under American Military Rule, 1899-1913," Philippine Social Sciences and Humanities Review, XXXII-1 (March 1967), pp. i-187.

Kiefer, Thomas M., The Tausug Violence and Law in a Muslim Villa. New York, Holt & Reinhart, 1972.

Rixhon, Gerard, ed. Sulu Studies I, Jolo, Notre Dame of Jolo College, 1972, x+272p.

## VII. その他

Cushner, Nicholas, Spain in the Philippines: From Conquest to Revolution (IPC Monographs, No. 1), Quezon City, Ateneo de Manila University, 1971, 272p.

Francisco, Juan R., The Philippines and India: Essays in Ancient Cultural Relations, Manila, National Book Store, Inc., 1971, xv+181p+7 plates.

Larkin, John A., The Pampangans: Colonial Society in a Philippine Province, Berkeley, Los Angeles and London, University of California Press, 1972, xvii+340p.

Historical Bulletin. Philippine Historical Review.

Asian Studies. Philippine Studies. Philippine Social Sciences and Humanities Review. Solidarity.

Filipiniana Book Guild.

Historical Conservation Society.

## 第6回国際アジア歴史学者大会（I A H A）に出席して

白鳥芳郎

去る8月26日より31日まで Indonesia 共和国 Yogyakarta 市で開催された。この大会の Opening Ceremony は同市の中心部にある Gedung Agung (迎賓館) で、国際アジア歴史学者大会会長カルトディルシア教授の挨拶並びインドネシア共和国副大統領ハメンク・ブオノ氏のドラムを鳴らしての開会宣言で幕が開られた。その後、参加者一行はガジャマダ大学の Senate Hall に移り、インドネシア独立宣言を起草した H. Moh. Hatta 博士の「Participating in the Struggle for Indonesia's National Independence」と題する特別講演に臨み、その後、同大学の University Club を会場とした研究発表の分科会に出席した。この大会の分科会は以下の九つの部会に分けられた。

1. Approaches to Asian history,
2. Sources for Asian history
3. Literature, folklore, and Asian history
4. Prehistoric development in Asia
5. Asian international relations in ancient times
6. Asian international relations in modern times
7. National integration and modernization in Asia
8. Social forces in Asia
- (9) Other papers, on Asian history

この大会には日本からも約20人余の参加者があり、本学会の会員である、山本達郎、永積昭、高橋保、伊東隆夫、生田滋、伊東昭司、等々諸氏の顔ぶれも見られた。本大会の発表に見られる特色は、その開催地が Indonesia であったためか、多くのものは Indonesia の歴史に関するもので占められており恰も Indonesia 史の大シンポジウムのような感を与えていた。従って Indonesia 史の専攻者には願ってもない国際会議であったように思われる。この大会への参加者数は約220名程であったが、地元の Indonesia 学者の数は圧倒的に多く、その他アジア地域からはタイ、フィリピン、マレーシア、シンガポール、香港、インド等各地からの参加者がそれぞれ研究発表を行ない、その他オーストラリア、オランダ、フランス、アメリカ等欧米学者の参加も少なくなかった。この大会の運営や会場の整理などは必ずしも手際よいものと思えなかったがガジャマダ大学の学生諸君の熱心な接待と協力は大変印象深いもので

あった。

とにかく 5 日間に亘って行われた第 6 回国際アジア歴史学者大会は盛会裏に行われ、アジア諸国から集まった学者相互の友好的交流や学問上の交換のためにも大いに有意義なものであったと思われる。次回の大会主催国はタイ国に決定した。

今回の大会に関する詳細な報告は、近く刊行される本学会機関誌「東南アジア 歴史と文化 5 号」に永積昭氏が執筆されるので、それに譲りたい。

## 庶務・会計報告

1. 新入会員（昭和 48 年 1 月以降） 19 名（別項）
2. 住所変更会員 4 名（別項）
3. 9 月 7 日現在の会計状況 残金高 127,145 円
4. 9 月 7 日現在の 48 年度（48 年 1 月 - 49 年 10 月）会費納入率は 52.3% です〔会員数 176 名、納入者数 92 名〕。未納者のご協力をお願い致します。

### 5. 第 14 回大会予告

a. 日 時 昭和 49 年 11 月 16 日（土）・17 日（日）

b. 場 所 上智大学（東京・四ッ谷）VII 号館 特別会議室

c. プログラム

イ 個人研究発表希望者は 10 月 21 日までに発表要旨（1000 字）をそえてお申し込みください。

宛先：東京都千代田区紀尾井町 7 上智大学文学部白鳥研究室内

東南アジア史学会

ロ 学会報告 — IAH A（於ジョク・ヤカルタ）出席者

ハ 調査報告 — 鹿児島大学ビルマ調査より

ニ シンポジウムについては現在のところ未定ですが、海外より当学会に参加の希望者があり、その研究者たちの出席と研究発表の確認を得て考慮しようと考えております。

d. 総 会

e. 懇親会 1000 円の会費で 11 月 16 日（土）に予定しております。

## 東南アジア — 歴史と文化 — 4

1974年10月発行予定

### 内 容 予 告

#### 論 文

- 白石愛子 ジャワ防衛義勇軍の設立  
青柳洋治 フィリピン先史時代の編年

#### 研究ノート

- 白鳥芳郎 ヤオの儀礼文書  
喜田幹生 車里・八百媳妇と元朝の驥縻  
山本達郎 ドンソン系文化の一側面  
赤木攻 マンラーア法典について  
桜井由躬雄 洪徳均田制に関する史料紹介(2)

#### 書評・紹介

- 宮坂正昭 *Sheikh Muhammad Naguib ab-Attas, The Mysticism of Hamazah Fansuri.*  
市川建二郎 *George V. H. Moseley III, The Consolidation of the South China Frontier.* 1973.

モンスーン・学会消息

- 永 積 昭 「インドネシア」という言葉の起源について  
—— Russel Jones 氏の近作論文 ——
- 深 見 純 生 関西インドネシア史研究会
- 藤 原 利一郎 フランスのベトナム研究
- 伊 藤 照 司 ヨーロッパの博物館に見る東南アジアの美術遺品
- 白 鳥 芳 郎 上智大学西北タイ山地民族第3次調査
- 永 積 昭 第6回アジア歴史学者国際会議（IAHA）に出席して

昭和49年9月発行

発 行 者 東南アジア史学会  
住 所 〒102 東京都千代田区紀尾井町7  
上智大学文学部白鳥研究室  
電 話 (03) 265-9211 内線 257  
振 替 東京 59721